

## 平成28年度 学術研究助成金〔一般研究〕実績報告書

平成29年5月22日

日本大学学長 殿

氏 名 松崎 祐介



所属・資格 日本大学高等学校・教諭

(日本大学豊山女子高等学校・教諭)

下記のとおり報告いたします。

1 種目	<input checked="" type="radio"/> 一般研究(個人研究) / <input type="radio"/> 一般研究(共同研究)	注:該当する種目を○で囲んでください。
2 研究課題	「言語学から文化記号学へ」	
3 研究目的	<p>本研究の目的は、言語の本質、すなわち「言葉とは何か」という問いの答えを探ることである。言うまでもなく言語能力（ランゲージ）こそが、人間を他の一切の動物から截然と分かつ生得のシンボル化能力であり、すべての文化的営為を可能にしているものである。そのような人間の根底を成す言葉の姿の探究を、本研究の最終到達点として設定する。</p> <p>本研究は、ソシュール（Ferdinand de Saussure, 1857-1913）の言述・理論に着想を得たもので、具体的には二つの方向へと議論を展開させる。第一に、表層における言語現象の考察を議論の出発点として、とりわけ日本語と英語を通して捉えられる世界における主客の関係（主客の〈融合〉と〈乖離〉という一般的傾向）に言及し、さらにはそれが、両言語を根底に持つそれぞれの文化一般に相同的かつ横断的に見られる性質であることに議論を及ぼせる。第二に、表層から垂直に降下したところに見られる、言葉の原風景、言い換えれば、未だ共同主観化されない深層意識における言葉の姿を追う。それは初源的、流動的（それゆえ「コードなき差異の戯れ」）で、関係が物化した慣用的・日常的言語から、多義性、重層性、象徴性を回復した様相を呈し、すなわち情動的コネクション（複数で身体的な一回性をもつ意味）を取り戻した姿をもつ。これこそが言語芸術創造の源であり、その諸相を、第一の論点ともあわせて、川端康成の『雪国』の世界に見出していく。</p>	
4 研究概要	<p>本研究では、『雪国』原文と Edward G. Seidensticker による英訳版 <i>Snow Country</i> の比較考察を通して、第一に、表層における言葉の諸相、すなわち各言語に見られる言語現象の次元で、とりわけ日本語と英語両言語の性質を探り、第二に、深層における言葉、すなわちそれを創造の源とする、文学という言語芸術における言葉の在り様に迫る。</p> <p>前者は一般に対照言語学（同時に認知言語学の興味の対象でもある）、あるいは横断的に言語外の表象諸分野にまで考察を及ぼすのであれば、文化記号論と呼ばれる領域に含まれる研究である。本研究では、原文における日本語と英訳版における英語を通して、同じ事象がどのように捉えられるか、言い換えれば、両言語によって分節され創り上げられる世界がいかにか異なっているかを明らかにする。結論を先取りすれば、日本語と英語による表象行為においては、〈語る主体〉と〈語られる客体〉の〈融合〉ないしは〈乖離〉という性質がそれぞれ見て取れると言える。</p> <p>これに対して後者の研究は（前述の文化記号論に対して）文化記号学と呼ばれる領域に踏み入ることになり、前者で行う表層における言語現象の考察および諸記号の解釈から、言葉の解体構築に及ぶことになる。すなわち意識の表層から深層へ垂直に降下し、制度化される以前の言葉の生成の現場に立ち会うことになる。より具体的には、慣用的で関係が物化した日常言語に対し、意識の深層におけるコード化される以前の多義的・重層的・流動的な言葉の姿であり、文学という言語芸術創造の源となる言葉の様相の探求である。それはまた夢に見る光景にも共通するもので、あるいはまた狂気という言葉に共通するものでもある（詳しくは丸山圭三郎『文化のフェティシズム』（東京：勁草書房、1984年）・『言葉と無意識』（東京：講談社、1987年）・『生命と過剰』（東京：河出書房新社、1987年）・『欲動』（東京：弘文堂、1989年）等参照）。『雪国』の物語進行過程において、「狂気」・「夢想」・「死」といった概念が見え隠れするようになる。本論では特に、終末の「雪中火事」の場面に焦点を当て、そこではまさしく夢に見る光景と同じように、特定の意味に固定されない複数の出来事がめまぐるしく変化し重なり合う様子が見られることに言及する。それらを原文と英訳版がいかにか異なる位相で描き出しているか、結論を先取りすれば、原文が深層の言葉の表出を実践しているのに対し、英訳版は外的世界（すなわち指向対象）の表現に留まっていることを明らかにする。</p>	
5 研究組織（共同研究のみ該当します）	研究代表者・研究分担者（役割分担）： 個人研究のため当該項目の記載なし	

※ホームページ等での公開の  否  いずれかを○で囲んでください。否の場合は、理由書を添付して下さい。

部科校名：日本大学高等学校

氏名：松崎 祐介

## 6 研究結果

研究成果は、平成29年度中に学内外の学会・研究会において紙媒体または電子媒体で論文として発表する予定であるが、すでに旧年度中にその基礎となる研究内容を学会で口頭発表した（日本大学英文学会1月例会「川端康成『雪国』と英訳版 *Snow Country* 一表層の言葉と深層の言葉を探る」（平成29年1月21日、日本大学文理学部）。その発表内容と、論文（近刊）の概要は以下のとおりである。

本研究では、川端康成の『雪国』原文と Edward G. Seidensticker による英訳版 *Snow Country* の比較考察を通して、日本語と英語に見られる言語現象が物語る両言語の体系的な差異および、それらに依拠して成り立つ語りの構図の異なりを探ることを第一の目的とした。両言語によって分節され創り上げられる世界がいかにも異なっているかを、物語を横断して明らかにした。理論的枠組みとして認知言語学の視座を援用し、日本語と英語による表象行為においては、〈語る主体〉と〈語られる客体〉との〈融合〉ないしは〈乖離〉という性質がそれぞれ見て取れるという仮説を、まず物語冒頭の比較から導き出した。その立場を一つの基盤とし、同時にそれを傍証するために、物語内に見られる様々な言語現象が仮説と親和性を持つことを示した。

作品冒頭の比較から導き出した、主客の融合と乖離という傾向を論文の重要な基盤とし、その論理的帰結として、それぞれの主体のスタンスは、前者が状況内在志向に、後者が状況俯瞰志向に結び付くとした。さらに、視点が状況内・状況外にそれぞれ置かれることで、語り手の語りは、前者が言語化されない1人称による主観的叙述へ、後者が3人称の客観的描写へ向かうという議論を展開した。以上の一般的傾向が、両言語で性質の異なる言語現象によって創り上げられ、表象されることを見た。その主なところとして、原文は、主体の座である「いま・ここ」において、移りゆく意識の流れを刻々と、客観化・一般化される一歩手前で直接的に言語化していくスタイルにあるから、現在時制と相性が良いのに対し、英訳版は、物語を過去の出来事として客観的時間軸上に再現することで、あくまでも語りの現在と物語の過去を時制によって明確に隔てる傾向にあり、したがって単純過去時制を専らとすることを見た。さらにこの議論は、原文の現在時制が詠嘆を表す助動詞「タ」と親和性があることに繋がり、加えて原文は主語をゼロ表示とすることで、語りは言語化されない1人称の生の声という響きを生み出すことに至った。他にも、一つには日本語の(S)CVと英語のSVCといった構文レベルにおいて、もう一つには両言語で性質の異なる感覚述語、直示表現などの文法体系のレベルにおいて、原文と英訳版とでは異なる世界が創り上げられていることを探究した。さらなる検討事項として、直接話法と間接話法、擬音語と擬態語、時間的前後関係の補筆の有無などをはじめ、他にも様々な項目が挙げられる。

以上を敷衍して、議論を第二の研究目的の達成へと導いていく。英訳版（三人称小説の形をとる）の語り手が、全知全能の「神の視点」から物語を語るのに対し、原文には語り手の視点と島村の視点が峻別されない傾向が見られ、語り手は読者とコードを共有するのではなく、登場人物と視点を共にするため、結果的に全体的状況を把握できず、島村に不明なことは語り手（＝読者）にも不明なままとなることに繋がる。英訳版が分析説明的で、登場人物の背景と関係を明確にして物語を構築していくのに対し、原文はいわば未分化のまま物語を進行させていく。物語の因果的な構築性を捨象し、隔絶した島村の胸中や視界へと密着し、その詩的世界を現象させることで、「西欧的な意味での、発端と発展と終末は全く認められない。真に解決されるものは、何一つない」（サイデンステッカー・エドワード G. 「川端康成」. 羽鳥徹哉編『文藝読本 川端康成』. 東京：河出書房新社，1977年，p.48）、「物語が必然的な因果関係によって漸層的に展開してゆく、そういう有機的構築性をこの作品はもっていない。読者は、その一つ一つの場面のうつくしさに酔い、その全体をつらぬく情趣的統一に一つの世界を感じる」（磯貝英夫「雪国 一作品分析の方法」. 『日本文学研究資料叢書 川端康成』. 東京：有精堂，1973年，p.208）といった評言が示唆するところに至る。

テキストがテキスト外世界を忠実に再現している英訳版は、出来事を客観的に省察し、それを一般的表現に置き換えて指向（表現）するスタイルにある。一方、テキストとテキスト外世界を峻別・対峙させない原文は（英訳版が「表現」するのに対して原文は「表出」すると言える）、繰り返しになるが、移りゆく意識の流れを刻々と、客観化・一般化されてしまう一歩手前で直接的に言語化していくスタイルにある。この対比は、慣用化・日常化した言語と、その場限りの多義的・重層的・象徴的言語との対比でもある。ここに至って、原文ひいては日本文学に見られる言葉そのものが、英訳版および西欧の文学を越えて、情動的コノテーション、すなわち複数で身体的な一回性をもつ意味をより喚起するであろうという、さらなる研究の見通しが立つ。これこそが、「かけがえのない一回的体験の純粋な瞬間性」（中山眞彦「救済としての文学 — 『雪国』とその仏訳について—」. 『現代文学』29. 1984年，p.41）、「およそ言語が許容しうる限りでの、体験のもっとも純粋な「私」性が、たちまち一般的なものと風化しようとするその際を、言葉の芸の中に刻み留めている」（同書，同頁）、「二項対立がひとつひとつ崩されていく瞬間に「実感」される、言葉の持つ際限のない出来事性」（上田渡「『雪国』—物語の構造化をこえて—」. 長谷川泉・平山三男編『川端康成『雪国』60周年』. 東京：至文堂，1998年，p.180）といったところのさらに深淵にある、言語芸術創造の源にほかならない。ここに至ると、文体論・文章論から文学批評・作品の解体構築へ、言語学から文化記号論を経て文化記号学の領域へ踏み入ることになる。